懐古園（小諸城の跡）　たんけんポイントの説明

平成 18 年 3 月版 / NPO 法人小諸町並み研究会

★たんけんマップで番号の場所をみてください。

小諸城は、中沢川と松井川に挟まれた 11 の丘と 12 の谷でできており、自然の空堀を利用した守りの堅い城です。また城下町より低い場所にあるのでこれを穴城と呼んでいます。
小諸城の原型は長享元年（1487 年）大井光忠という人が、今の大手門の北に鍋蓋城を作ったことに始まります。その子光安は天文年間（1532 年～）の始め、今の二の丸の場所に乙女城を作りました。その後、小諸の地は武田氏によって攻略され、戦国時代の末期に武田の武将の山本勘助と馬場信房という人がこのめずらしい形のお城を設計しました。
江戸時代になり仙石秀久が城郭を完成させましたが、この人は、豊臣秀吉、徳川家康に仕え、たくさんの戦で勇敢に戦った武将です。
徳川幕府が倒れた後、1872 年（明治 4 年）小諸城は廃城となりましたが、藩の財政が苦しかったためにお城の中のほとんどの建物は売りに出され、この地から姿を消してしまいました。
かろうじて残ったのが大手門と三の門で、今は両方とも国の重要文化財に指定されています。明治 13 年（1880 年）、小諸城は旧藩士たちの手により三の門から奥が公園（懐古園）としてよみがえりました。

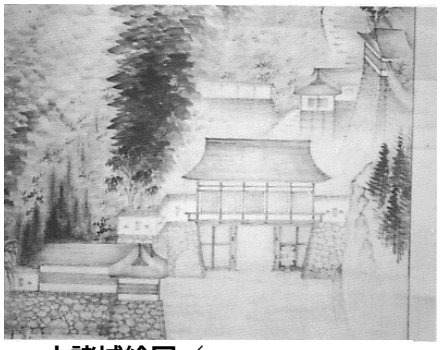
1.大手門

この門は、小諸城の表玄関にあたる門で、ここから先が城の中です。この次が三の門ですから、ここは城の中心の本丸から四番目の門ということになります。
江戸時代はじめ、小諸城主の仙石秀久が、江戸から大工を招き、瓦は三河（愛知県）から取りよせてつくりました。一階は守りの堅い門、二階は書院風のおしゃれなデザインで、桃山時代のぜいたくな気風を感じさせます。
明治になって小諸藩がなくなるとともに、町の商人に買い取られました。その後、門の部分に部屋をつくって利用したので、本来は二階立ての門ですが、今は三階となっています。そして料理屋として使われたり、一時は小諸義塾の仮室として使われていたこともあります。この門は、国の重要文化財に指定されており、来年から３年かけて江戸時代の門の姿にもどす工事をおこなう予定す。

2.三の丸あと

大手門から西側の線路のあたりまでが三の丸でした。
御会所といって今の役所に相当する場所や、太鼓櫓、御厩、

鹿嶋神社、牧野氏菩提寺である泰安寺、藩校の明倫堂などがありました。鉄道が敷かれ、道や建物がつくられ、現在それらの遺構はほとんど残っていません。
右の絵は、江戸時代の終わりに描かれた三の門の絵です。これは三の丸方向から見たもので、三の門、花見櫓、水櫓、御城米蔵門、二の丸、南丸が描かれており、当時の城の様子がよくわかります。
この絵と同じ風景を、市営駐車場の一番線路に近い高台から見てください。また、足柄門のあった位置もここから確認してくみてください。


小諸城絵図／
「江戸時代の小諸藩」より

●足柄門のあったところ

慶長元年（1596 年）二の丸と三の丸の間に、土手をくずしてつくって道を通し、足柄門を作りました。今のキャッスルホテルの前の道路のあたりになります。小諸藩の役人は、ふつうは城に行く時ここを通っていました。明治４年に、荒町の光岳寺移され、今も惣門として使われています。

足柄門を移築した、光岳寺の山門（高麗門の形式）

3.三の門

小諸城には、本丸側から順番に、黒門（一の門）、二の門、三の門、大手門(四の門)の大きな門４つと、中仕切門、足柄門、御城米蔵門、不開門の、全部で８つの門がありました。
三の門は、渡り櫓といって左右の石垣と一体構造の様式で、石垣は加工した石を積み上げる切込みはぎという積み方になっています。両袖には弓矢・鉄砲を射かけるための矢狭間・鉄砲狭間もついており、敵と戦う門として作られたものです。甍にはシャチが付いていますが、これは近年に取り付けられたものです。
寛保2 年（1742 年）８月１日の大洪水によって、小諸の町のかなりの部分が流されました。この時、三の門も足柄門とともに流されました。24 年後に再建されて、現在では小諸のシンボルとして最も重要な建造物となりました。
なお寛保の洪水では、多くの人命が失われましたが、その御霊を弔うために、今でも毎年８月１日にはお墓参りをする風習があり、千曲川では灯篭流しが行われています。

４.徴古館

徴古館の建物は、今から 20 年ほど前（1984 年）につくら

れた新しいものです。
春日局･家光像、鎧兜、牧野家歴代藩主の絵や写真などが展示されています。徴古館は本丸玄関のデザインをお手本にして作られていますので、これを見て小諸城の本丸がどのようだったか想像ができます。

５.水櫓

三の門から見て右手の石垣が二の丸です。その前の道の左側に石垣の出っ張りがありますが、ここが水櫓の跡です。
城内に湧き水がないため中沢川から樋を通して用水を引き、二の丸に水を汲み上げたのがこの櫓です。（トル）
三の門から二の丸に向かう道は、今は広い坂道ですが、江戸時代はこの道はなく、水櫓のむこう側に急坂があって、そこを登って二の門にいたりました。この道は一騎立といって、馬一頭がようやく通れるほどの狭い道であったといいます。これも敵が入りにくくするためのくふうです。
なお、二の丸の石垣は 20 年ほど前、（1984 年）に新たに積み直されたものです。

6.二の門の「枡形」

三の門からの坂を登り、右に曲がると二の門の跡に着きます。（トル／図をいれます）二の門は、現在は礎石が残っているだけで門はありません。
門の前につくった四角い広場を、「枡形」といいますが、敵が押し寄せてきた時に、敵を集めて頭上から矢で攻撃するための空間です。枡形に入る道は曲がり角になっていて、兵を閉じ込める工夫がされています。
小諸城の城郭は東西の方向に一直線状に配置されていましたが、大手門から本丸までの間にこのような枡形の形をした場所が少なくても６箇所設けられていました。小諸城は、道に沿って多くの曲がり角や急坂、或いは狭い場所もあって、非常に攻め込むのが難しい城構えでした。

●木村熊二のレリーフ

二の丸の入り口の石垣には、小諸義塾を創設した木村熊二のレリーフが埋め込まれています。
小諸義塾は、明治時代に小諸の商人が協力してつくったもので、有名な小説家の島崎藤村もここで先生をしていました。木村熊二は、三岡で桃の栽培を始めるなど、小諸の新しい産業の育成にも力をつくしました。

7.二の丸

小諸城ができる前の戦国期に、ここに乙女城（白鶴城とも呼ばれた）がありました。ここからの浅間山一帯の眺めは素晴らしく、大切な客を招く場所だったと言われています。
また二の丸の南東隅（懐古園の入場券の自動販売機のあるあたり）の石垣の上には高い櫓がそびえていて、三の門から二の門への通行が監視できるようになっていました。
戦国時代の有名な「関が原の合戦」の時、中山道を通ろうとした徳川秀忠が上田の真田氏の抵抗にあい、約 2 週間この二の丸にとどまり、結局秀忠は戦いに間にあわずに徳川家康にたいへんしかられました。
また、真田氏との戦いの間、秀忠が陣頭指揮のために座ったという腰石が、三の門の左手の花見櫓のあった場所に残されています。
江戸時代、ここには御氷餅晒所といって「かきもち」を作る部屋が 2 つもあって、時々将軍家へも献上しました。
現在、二の丸には福寿草が一面に植えられており、乙女城や白鶴城という名前にふさわしい美しい場所となっています。

●若山牧水の句碑

二の丸の石段左手の石垣には、歌人の若山牧水の句が掘り込まれています。牧水は病気治療のために明治 43 年、市町の田村医院で暮らしていたことがあります。
「かたはらに秋くさの花かたるらく　ほろびしものはなつかしきかな」

8.北の丸と南丸

二の丸から本丸に向かう道の右手が北の丸、左手が南丸で、その間に中仕切門がありました。　この門も明治時代に売られてしまいました。北の丸は台所、食料庫や隠居所などとして使われていましたが、80 年ほど前(1928 年)に弓道場となりました。また南丸は二の門を守るための場所で、武器庫などがありました。

9.鶯石

南丸に上がる石段横の石垣に鶯石と言われる大きな岩が埋め込まれています。雨で濡れると梅に鶯の絵が浮かび上がるとか、殿様が来ると美しい声で鳴いた、などの言い伝えが残っています。

10.黒門橋と黒門

小諸城の一番奥の門を、黒門または一の御門と呼んでいました。
格調の高い瓦葺の薬医門と呼ばれる形の門でしたが、今は礎石（土台の石）が残っているだけです。
黒門の手前にあるのが黒門橋で、別名算盤橋とも呼ばれていました。この橋の裏側には算盤のように車が取り付けられていて、敵が進入してきた時にかんたんに橋を取り外せるようになっていたためです。また、この橋の下に掘られた紅葉谷の名前から、紅葉橋とも呼ばれていました。

●野面積み

黒門の正面の石垣は野面積みです。これは古い時代の積み方で、小諸城にある石垣は大阪城、安土城なども手懸けた滋賀の大工たち（穴太衆）を呼んで作らせたものです。三の門の横の石垣は、切込みはぎと言われる積み方で、野面積みよりも新しい技術が使われています。どのように違うか見くらべてみましょう。

11.本丸跡に建つ懐古神社

本丸御殿は、江戸時代のはじめ（370 年ほど前／1633 年）、その時の藩主松平憲良が江戸より大工の棟梁を呼んで建てたものです。
本丸には藩の仕事をする場所、藩主と家族が生活をする場所、台所や物置のある場所がありました。
本丸御殿は明治になって売られてしまい、明治 13 年（1880 年）、本丸の跡には懐古神社が建てられました。ここには荒神（火の神様）、天神（学問の神様）と牧野家歴代の霊を祀られています。

●懐古神社境内の碑

懐古神社の参道の脇には、懐古園の謂れが漢文で書かれた碑が立っていますが、この字は勝海舟が書いたものです。
また近くの佐々木如水の碑には山岡鉄舟・高橋泥舟の書があり、これらをあわせて、幕末の三舟と言われている三人の書がこの場所に揃っています。この三人の人たちは明治維新の際に江戸城を無血開城に導き、江戸のまちを戦火からすくった英雄です。

12.鏡石

懐古神社の横に鏡のように磨かれた『山本勘助の鏡石』といわれる石がありますが、これは明治維新のあとで鹿島

神社から移してきたものです。この石は武田信玄の命令で勘助が小諸城の縄張り（設計のこと）をした時に愛用したものと伝えられています。
どのくらい顔がよく映るか試してみましょう。

13.天守台

本丸の北西の一角が天主台の跡です。江戸時代のはじめごろ（370 年くらい前）まで三階建ての天守閣があったとされていますが、落雷で焼けてしました。その後は幕府の許しが得られず再建されることはありませんでした。天主台にあがる階段や石垣の上の狭い道はとても危険です。足元に注意してゆっくり歩き、絶対に走ったりしないでください。

14.富士見台

江戸時代、ここには小諸城の鎮守として稲荷神社がありました。千曲川の上流方向を見わたせる絶好のポイントであり、（トル）監視所としての役割もあったでしょう。よく晴れた日には富士山が見えるので、富士見台といいます。
南側には木谷という、懐古園で一番深い谷があります。動物園に通ずる白鶴橋からは、崖の表面にある火山灰の堆積層がよく見え、谷の形成のようすがわかります。

15.馬場

江戸時代、ここは乗馬の練習をするための「馬場」でした。往復するだけの「鉄砲馬場」という形式の馬場で、100mの直線コースがありました。1670 年代には土手に桜の木が植えられ、桜馬場といわれるようになりました。北西の隅（藤村の碑のある方角）に小諸藩の金庫である御金蔵と銭蔵そして武器庫が作られ、だれも近づけないように守られてました。
今から 90 年くらい前、1918 年に馬場を円形のコースにして草競馬を行った記録があります。また戦後ここは自動車教習所としても使用されたといいます。

●小諸八重紅枝垂

現代になってここは染井吉野・枝垂れ桜・小諸八重紅枝垂れなど 500 本の桜が植えられて、4 月中旬にはお花見の客でにぎわいます。とくに小諸八重紅枝垂れという種類の桜は、かつては懐古園に古木が 3 本あるだけの貴重種でしたが、市民の努力で苗の移植が行われて、今は市内に 1000 本くらいに増えています。こいピンク色の美しいしだれ桜です。

16.藤村の碑

島崎藤村の「千曲川旅情のうた」の句碑は、80 年くらい前（昭和２年／1927 年）にこの場所に立てられました。
藤村は、明治時代の有名な小説家、詩人で、６年間小諸に住んで、小諸義塾の先生をするかたらわら、作品を書いていました。
「千曲川旅情のうた」は、昔は国語の教科書にものり、小諸を全国的に有名にしてくれました。
藤村は、「この辺りで遊びまわる土地の少年達がこの詩を読み、年若い人たちから呼び掛けられる」ことを楽しみにしていた、と書き残しています。ここでこの美しい詩を読んでみましょう。

千曲川旅情のうた

小諸なる古城のほとり　雲白く遊子悲しむ
緑なす繁蔞は萌えず　若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡辺　日に溶けて淡雪流る

あたたかき光はあれど　野に満つる香りも知らず
浅くのみ春は霞みて　麦の色はつかに青し
旅人の群はいくつか　畑中の道を急ぎぬ

暮れ行けば浅間も見えず　歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の　岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて　草枕しばし慰む

17.水の手展望台と不開門

馬場の西北端の東屋のある場所を水の手といい、千曲川下流域を見渡す監視台でした。西側には千曲川に下る急な崖が、北側には深い地獄谷があって、小諸城の守りの固さがよくわかります。
千曲川の向こう側の山に、袴腰という台形の山が見えます。これは武田軍の狼煙台の跡で、ここで煙をたいて遠くに合図をおくっていました。

●不開門の跡

江戸時代は、水の手展望台の横に不開門（不明門とも書く）がありました。これは城が落城した時にだけ開け、城主の一族が逃げ出すための門です。また、この門の少し下には

井戸が掘られていて、井戸の途中の横穴から千曲川側に逃げることができた、という言い伝えがあります。
しかし江戸時代は平和だったので、この門は一度も開いたことはありませんでした。
明治になって城内の建物が売りに出された時、この門だけは縁起が悪いとして誰も買い手がつかなかったといいます。

18.大平山（城山）・森のたんけん

馬場の西側に、千曲川に向かって下りてゆく急な傾斜地があり、大平山（城山）と呼ばれています。ここは千曲川方向からの敵の攻撃を防御するための重要な場所でした。みなさんも登り降りしてみて、この城がいかに攻めにくい地形だったのか実際に体験してみましょう。
現在は馬場の中ほどからサイクリングロードに降りる道（落差70m）があります。この道を「千曲音の道」といいます。千曲川の流れの音や森に集まってくる野鳥の観察を楽しみながらゆっくりと歩きましょう。
千曲川を左に見ながらサイクリングロードに沿って進むと、右手に切り立った崖が見えてきます。この崖の上に水の手展望台があり、小諸城がいかに難攻不落の城であるかがよくわかります。
やがて「ふれあいの道」の入り口がありますから、ここから登って郷土博物館の脇に出ましょう。途中に「カブトムシの森」もあるよ！

19.武器庫

馬場の北側には、武器庫や、千両箱が60箱も入る地下室のある銭倉など、重要な建物が建っていました。銭倉は、今は与良に移っています。武器庫は、最近また復元（もとの建物の材料をつかって建て直すこと）されました。

20.酔月橋

雉子平と水の手の間の深い谷は、小諸城の北側を守る重要な役割を担っていました。
ここを地獄谷と呼び、その名の通りこの谷を越すのは容易なことではありませんでしたが、現在は鹿嶋神社から馬場へは橋を渡って簡単に城内に入ることができます。昔、小諸城を酔月城とも呼んだことからこの橋は酔月橋と名付けられました。

21.鹿島神社

戦国時代の終わり（今から約 400 年前／1596 年）、仙石秀久は城内の鎮守の祠を小高い丘の上に作り、鹿嶋神社としました。それが今の駅前の鹿嶋町でしたが、今から 57 年前（昭和 24 年／1949 年）に、駅前整備のために現在の雉子平に移築されました。

この時に駅前の丘を削った土砂で谷を埋めて現在の懐古園駐車場が出来上がり、そして駅前も商店街に生まれ変わりました。

22.藤村記念館

藤村記念館と呼ばれる施設は、島崎藤村の生れ故郷の馬籠（中津川市）と、小説家としての第一歩を記した小諸にあります。両方とも谷口吉郎という有名な建築家により設計されました。藤村が大事にしていた「簡素」（よけいなものがごたごたとないこと）な生き方を、建物のデザインとして表しています。藤村の命日である 8 月 22 日には、毎年ここで藤村忌が行われています。

23.荒神井戸と大ケヤキ

本丸御殿の玄関を入ると政務所があり、右手が台所、奥が藩主の居住場所でした。台所から北側に出ると荒神井戸がありましたが、これが城内でただ一つの井戸で大洪水の後、寛保年間（1741～1743 年）に作られたものです。深さが 18m ある深井戸で、お姫様が落ちたという伝説があります。

荒神井戸のそばに樹齢500 年と言われる大きなケヤキの木があります。小諸城築城以前からこの地に根を下ろしていたことになり、真の『城の主』ともいうべき古木です。冬に欅の葉が落ちると、やどり木（大木の枝からはえる別の小さな木）が沢山ついていることがわかります。

（明治時代のはじめに売られた、城の建物の移築先の例）

2 と 3 の間.足柄門／荒町の光岳寺移設され、今も惣門として使われている

9 と 10 の間.中仕切門／本町の清水屋の中の建物の骨組みに使われていたが、今は町屋館の蔵の 2 階にその一部が展示されている。

10.黒門／平原の正眼院の山門として移築された

11.本丸御殿／建物はばらばらにされて売られたが、書院（応接間、広間）の部分だけは、北御牧の小山家で建て直し、今も使われている。

19.銭倉（武器庫近く）／与良の虚子庵のそばの旧松屋に移設され、公開準備中。